

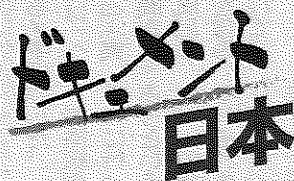
若い段階で保存、将来の出産へ備え

キャリアか出産か―。両立に悩む働く女性の間で「卵子凍結」を選ぶ動きが広がっている。若い状態の卵子を保存し将来の妊娠・出産に備えるためだ。ただ出産を保証するものではなく、身体的な負担も大きいことから医学界が「推奨しない」との見解を示すなど意見は割れている。国も実態を把握しておらず、利用者任せの状態が続いている。(下川真理恵)

卵子凍結を手掛けるメディカルパーク横浜(横浜市の培養室。液体窒素が入ったタンクには識別番号が書かれた板状の保存容器がいくつも入っていた。

東京都在住の女性会社員(35)は2020年10月に18個の卵子を凍結した。不妊に悩んでいたわけではないが、働き続ける中で将来の妊娠の可能性を高めたいと決断した。費用は80万円以上。凍結までに10回通院する必要があったが「卵子の老化が進む35歳が一区切り。誕生日を迎える前に

卵子凍結 仕事も子供も



卵子を保存しなかった。米国への経営学修士号(MBA)留学を考え始めた20代後半のころ卵子凍結を知った。親から留学を反対されたが「34歳までに妊娠していなかったが、国内では2010

たら卵子凍結という選択肢もある」との思いが背中を押した。凍結融解した未受精卵の移植あたりの妊娠率は3割程度。卵子凍結は妊娠や出産を保証するものではないが、女性は「人生で経験したいことをな

卵子の凍結作業をする培養士(横浜市中区)

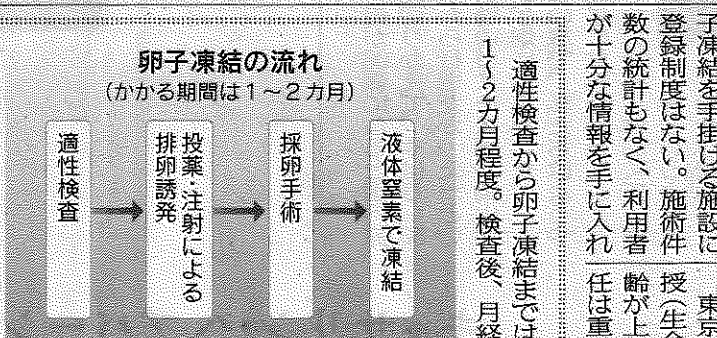
年代に入り健康な女性の利用が広がり始めた。国内で多くの卵子凍結を手掛ける医療法人オーク会(大阪市)はキャリア継続など「社会的な理由」で20年に前年比55%増の301件の卵子凍結を行った。

メディカルパーク横浜の菊地盤院長は「仕事と健康な女性の卵子凍結を巡っては専門家の意見が割れている。日本生殖医学会は13年にまとめたガイドラインで加齢などを理由にした卵子凍結を認めないが、日本産科婦人科学会の専門委員会は15年に「推奨しない」との見解を示した。高齢出産につながるリスクなどを懸念するためだ。

海外でも対応は分かれている。米国には優秀な女性を獲得するための卵子凍結の費用を助成する企業もある。14年以降、米フェイスブックやアップルが福利厚生として始めて注目を浴びた。

一方で、法律で認めていないフランスでは今夏改正に向けて解禁議論が起きている。神戸薬科大の小門穂准教授(医療倫理)によると「卵子凍結は『私生活を犠牲にして仕事を追求しない』という圧力につながる」という指摘があるという。

妊娠率3割、学会で賛否



料金体系 説明求める声

卵子凍結は自由診療で各病院で料金体系が異なる。施術代と保管料がかかるのが一般的で費用は数十〜数百万円程度。「当初20万円くらいと聞いていたが270万円かかった」という女性もおり、料金体系の十分な説明を求める声もある。採卵時にはまれに出血や感染のリスクがあり入院することもある。

トクマガリ

野口さんきょう地球帰還 日本の野口聡一飛行士が2日午後、約半年間滞在した国際宇宙ステーションから地球に帰還する。米宇宙で妊娠時期を遅らせても将来両立できる環境が整うとは限らない。女性が働きやすい環境づくりが先決だ」と強調する。厚生労働省によると、19年の25〜29歳女性の離職率は23%で男性を6%上回った。妊娠出産を機に離職する女性が多い。神里准教授は「卵子凍結をする医療機関は増えており、企業の参入も始まっている。国は実態の把握と基準づくりを進める必要がある」と話す。